

四季彩しきさい

嶋 久子

竹生島へ波を蹴立てて船は航くま青の布を引き裂きゆけり

赤き橋渡れば女人高野へと続く満開石楠花の道

たまゆらの命なれども酔芙蓉夕べほのけきくれなゐを見ず

はつなつの白馬八方斑雪水張田の面に裳裾映して

凡穴を覗けば冷気吹き出して我は古代の人間となる

小倉山に入り行く夕日今し見ゆ盆の猛暑も茜に変へて

千代崎の浜辺に見出でし浜豌豆波を枕にゆるり揺られて

底ごもる冬の川鳴り金沢川の夕岸に音高まりゆくも

雪の駅に帰省する孫ら待ちをれば潮の香のせて南紀二号来る

今朝の雪白き田の面は隈もなし幼の踏み込む新たな一歩